保育の出前情報誌

すかんぽとやま

第21号

今号の内容

★「子どもの育ちを支える
子育て支援フォーラム」
―すべての子どもの
権利と育ちを保障していく
社会の実現を目指して―

- 「保育の出前」実演
  入善町保育士会
- 記念講演「こども食堂と私たちの地域・社会」
  認定NPO法人全国こども食堂支援センター・むすびえ
  理事長　湯浅　誠
  （社会活動家・東京大学特任教授）

運動遊び教室より
親子運動遊びへ

お互い片手をつないで、「よーいスタート！」
手はつないだままお尻をタッチ
15秒間逃げ切れたら勝ち！

作ってみよう！手作り玩具より
エアーホッケー遊びへ

小矢部市保育研究会では、施設の統合や、コロナ禍において従来の研修を行うことが難しく、所内園内研修を中心として進めていますが、職員同士の交流もなかなかできない状況が課題となっていました。新型コロナウイルス感染症が落ち着き、少しずつ日常が戻ってきているので、保育者のスキルアップや、情報交換ができるような研修の場を計画し開催しました。研修での学びを活かして、日々の遊びや親子の触れ合いあそびに取り入れることで、子どもの遊びの充実につながりました。

この情報誌は、共同募金の助成を受けています。

令和5年度「子どもの育ちを支える子育て支援フォーラム」

―すべての子どもの権利と育ちを保障していく社会の実現を目指して―

令和6年1月20日に、「子どもの育ちを支える子育て支援フォーラム」を開催しました。わが国では人口減少が進み、核家族化・世帯員数の減少に加え家族相互に助け合う力が低下し、地域住民同士の交流の機会も減り、家庭と地域へのつながりが弱くなっています。保護者の子育てへの不安や悩み、家族や地域からの孤立が、児童虐待をはじめ、子どもの命を脅かす深刻な課題につながっているともされています。

このような状況の中で、未来を担う子ども一人ひとりの育ちを保障し、子育て家庭とともに、地域社会全体で支えていくような「子育て文化」を育むことが重要となっていることから、富山県保育連絡協議会では、平成9年から関係機関・団体と協働のうえ実施している子育て支援「保育の出前」活動実践を通し、子育ての楽しさや喜びを地域社会へ広めるなど、子育てしやすい地域づくりを進めているところです。

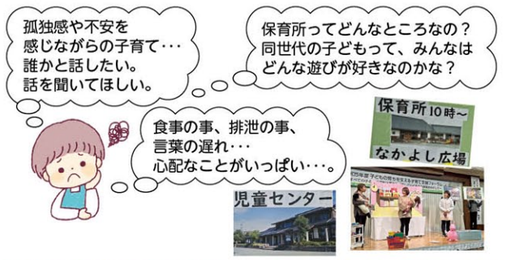
今年度のフォーラムは、関係機関等相互の「つながり」を一層深め、地域が中心となって子育て支援を充実させるための仕組みを考えることを目的に開催され、「保育の出前」の実演と記念講演を行いました。

「保育の出前」実演・実践発表

入善町保育士会
テーマ『未入所児家庭への子育て支援
～なかよし広場を通して～』

入善町では、保育所入所前のお子さんをもつ家庭への支援事業として毎週火曜日10時からの1時間、各保育所を解放し、地域の未入所児を対象とした「なかよし広場」を行っています。

コロナ禍で妊娠・出産・子育てをしてきた家庭が多く、人と人とのつながりが希薄になり、子育てに孤独感や不安を感じている家庭も多くありました。悩みの中には…



なかよし広場を通して…

子育ての悩みや不安を、一人で抱え込まずに周りの人に話せる場

保育所の遊びや生活を知り、安心して入所を迎えられるように

入善町の子育て支援や遊び場の周知

保護者が子育ての困難や悩みを一人で抱え込まず、ホッとできる場所や話せる相手がいることは、大きな心の支えになると思います。コロナ禍を経た現在、保育所入所前のお子様をもつ家庭にとって、地域の保育所・保育士は子育ての支えになると「なかよし広場」を通して改めて感じました。

また、寸劇の中で入善町の名所や名産を取り入れた歌が披露されました。子育てにかかわらず、入善町に興味がわき、町の魅力を発信してくださいました。

みんなが笑顔で元気になれるよう、気持ちが「つながりたい」「集いたい」「触れ合いたい」そんな場所が増えていけるように、保育士や地域の方々が子育てを支援し、応援しています。

「保育の出前」の実演と実践発表の感想

～アンケートより～

- 町全体で子育て支援をサポートしているのが素晴らしいと思いました。
- 自分の子どもが小さい時に親子サークルを利用して、少し先に生まれたお兄ちゃんやお姉ちゃんの成長をみて、我が子も○○歳にはこんなことができるんだなと見通しを立てられて助かったことを思い出しました。

子育て支援事業 保育の出前

子育ての楽しさを出前しま～す♪

子育ては楽しく喜びと感動いっぱいのいとなみです！

子育て支援事業「保育の出前」とは？

保育士等が子育て支援事業の一環として地域に出向き、専門知識・技術を活かした遊びの実演を行い、子どもとの関わり方や子育ての楽しさ・喜びを伝えるボランティア活動（無償）です。

具体的な保育の実演内容とは？

保育士等2～3人で行う20分程度の実演で、内容は次のとおりです。

1. 家庭にある材料を使って手作り遊具を作り、家庭で子どもと一緒に楽しめる遊びの紹介
2. 運動遊び、手遊びなどを通して、サークルや家庭で笑いや会話が広がるような遊びの紹介
3. 子どものしぐさ、遊びを通して発達のポイントや、子どもが求めている関わり方など、子ども理解につながる例の紹介

地域の子育てを応援します！

出前先は・・・
公民館、学校、児童館、企業など

記念講演

こども食堂と私たちの地域・社会

認定NPO法人全国こども食堂支援センター・むすびえ
理事長　湯浅　誠 氏
（社会活動家・東京大学特任教授）

「こども食堂は災害時にも活動できる ～石川県のこども食堂の事例～」

直近で大きな地震が起こりましたので、ここは北陸ですしその辺りからお話を始めていきたいと思います。私は地震が発生して、まず石川県のこども食堂のネットワーク団体の方と連絡を取りました。金沢の方ですが、県のネットワーク団体なんで県下のこども食堂の人たちと、全部じゃないけどつながってるわけですね。奥能登の輪島とかのこども食堂の方との連絡もなかなか取れなかった。状況もよくわかんない中で団体としては支援物資を金沢で買って七尾市役所に持っていこうとしてるというやり取りをし始めたのが2日でしたね。

もう一つ、石川県の小松市のこども食堂の方が、元旦こども食堂をやってくださっていて、大きな災害だからどうしようかって話してたら、その話を聞いてた一人の子がこれ使ってくれって自分のお年玉を、5000円出したっていうんですよ。この5000円は重いって彼女が言ってました。それで七尾に行って、被災してるコンビニさんで、おにぎり200個とか本部に発注して届けてもらったものを半額とか、3割とかで自分たちで買って、七尾の皆さんに配るっていうのを2日からやり始めました。「物資を買うお金はどうするの」って聞くと、お寺の住職さんなので、全国のお寺のネットワークの人たちが寄付をしてくれて、そのお金でやっているっておっしゃっていました。

私たちもヤフー募金で応援基金というのを立ち上げました。こういう時って、誰かの力になりたいって思ってくれる人が、世の中で増えるんですね。1000万ぐらい集まりまして私たちからも500万追加して被災地の方たちの支援に使ってもらうっていうことをやっています。

こども食堂の皆さんが、こども食堂に来る人に限らず被災地全体の生活支援をされているということは、非常に多くの地域で起こっています。2016年の熊本地震、2018年西日本豪雨水害でもそうでした。意外かもしれませんが、こども食堂と防災ってとても強い結びつきがあるんですよ。

「非常時の鉄則 ～できる人が、できるときに、できることから～」

非常時の鉄則原則に「できる人が、できるときに、できることから」という言葉があります。例えば避難所で物資を配ろうとすると、数が足りなくて公平に配れないっていうことが起こります。次の物資が届くのを待てばいいのか、でもいつ届くかはわからないなど、非常時ってそういうのが読めません。できる人が、できるときに、できることから、正解を待たずに今できるところをやる、そうしないと結果的にひどいことになる、これが非常時の恐怖で、失敗例が山のようにあるんです。

非常時の対応だけじゃなくて、地域活動のスローガンも、「できる人が、できるときに、できることから」があるんですよ。地域活動って事実上ボランティアで、こども食堂もそうなんですよね。地域活動の原則は、できるとき、できる人ができることがある、というふうに言われてきました。これは非常時の原則と同じなんです。一方は平時、一方は非常時、共通するものがあるんですよね。

うちにはうちのメンバーで、メンバーの中でできることをやっていくしかない。それは平時にも非常時にも共通している。こども食堂の人たちって、普段からそうやってきてる人たちなんですね。

「こども食堂はどんな場所?」

聞いたことはあるけど、行ったことはないというのが、多くの人にとってのこども食堂っていう場所です。こども食堂と言いつつ、実際には子ども、保護者、高齢者も来ているというのが普通です。

こういうのを私たちは多世代交流拠点と言っていました。地域の方が子どもからお年寄りまで関わる場所、交わる場所、知り合う場所、つながる場所ですね。

じゃあこども食堂って言わなきゃいいんじゃないかと思いませんか?こども食堂って言うから、子どもだけじゃないかと思うと。「みんな食堂」「地域食堂」でいいじゃないかと。正直名前は何でもいいんです。

ふれあい食堂をやっている方が、ふれあい食堂もこども食堂の一つだと言うんです。それは地域の皆さんに、みんなの食堂をやるから手伝ってほしいからなんだそうです。ボランティアの人の力を借りながらやる活動ですからね。

「『子どもたちのために』が地域の原動力 ～少子化の中で増え続けるこども食堂～」

地域の皆さんに協力を仰ぐときに、「みんな食堂やるから協力してほしい」と言って、仮に地域の人たちから引き出されてくる力の総量を100とします。「こども食堂がやるから手伝ってほしい」と言うと、その力が120とか150になる。みんな「子どものため」って言われると手伝ってやるかという気持ちになってくれるんです。こども食堂という名前で、実際には多世代、いろんな人たちが交わる場所がどんどん増えていっているということです。子どもが減って小中学校が統廃合さ

れ減っている中で、こども食堂は増え続けているんです。地域のつながりを作る場所だからね。子どもからお年寄りまで、そして、地域のつながりをつくるような機会が世の中全体から減ってきているので、何とか頑張って作ろうという人たちが、全国ではこども食堂を立ち上げていこうということなんだろうと思っています。

「富山市黒瀬谷の事例～地域の未来を考えよう～」

富山市の南に車で30分ぐらい行くと、黒瀬谷っていう地区があります。ここ数年で保育園も小学校も閉鎖で、このままいったら人が住まなくなるんじゃないかと、地域の危機感を住民の方が持ったんです。それで住民の方たちは、黒瀬谷地区の未来を考えようとワークショップをやって、これから取り組むべき柱と言って出されたのがこの3つでしたね。

まず1つ目が、女性部の復活。婦人会が7年前に解散して、女性たちが集まって自分たちの意見を反映させる団体がなくなったから、復活させたいということでした。2つ目が、自分たちでできることは何だろう。すごいことはできないけど、ごはんならずっと作ってきたのでカフェとか食堂とかならできると。なので、食堂カフェの運営をしてみんなが集まれる場所を作ろう。3つ目の、あともう1つは、どうやってそこへ移動するかなんです。公共交通機関やタクシーは、かなり危ういという状態になってきていますから移動は大問題です。何とかして集まる場所を作りたい、そこまで移動できるようにしたいということでした。

「人が集まる場所～リアルでつながる難しさ～」

そういう場所の機能ってのいうは、まず「集う」ことです。例えば町内会の子ども会とかやっていますか？子どもたちの溜まる場所って駄菓子屋とかね、あとは空き地ですよね。秘密基地を作ったり、何かしたりするんですけど、そういう場所もなくなりましたよね。90年代以降、そこで遊んでいて怪我をしたら、一体誰の責任なんだって考えになったんですよ。空き地を管理している人たちは、責任追及されたくないから人が入れないようにしたんですね。そうやってどんどんそういう場所がなくなっていった。大人はっていうと、買い物ついでに商店街の前の道路で立ち話しているという光景も、商店街がシャッター通りになったためになくなりましたね。

集まったり溜まったりすることが、世の中からどんどん減ってつながるって言ったらスマホとかネットとかそういう話になっちゃった。今、リアルで人とつながるっていうのが難しくなっている。でも、人って「誰かとつながりたい」と思っているんですよ。一人暮らしが増えている、ご近所さんと付き合いがある人も減っている、でも気持ちはつながりたいから、そのつながるっていうことをやる場が、こども食堂として増えていっているっていうことなんだと思いますね。

「こども食堂のキーワード『これならできると思った』」

こども食堂をやっている人たちから、「これならできると思った」っていうことをよく聞きます。子どもの支援というと、例えば学習支援とかあるんですけど、自分でできるかって言われると、できる感じがしないんですね。でもこども食堂だったら、みんなで作ってみんなで食べる。これならできると思うという方がとても多いんです。自分の気持ちを盛る器として選び取ってということなんじゃないかと思います。

「村や離島でも地域のつながりを求めている」

離島や村と聞くとみんな知り合いだからこども食堂なんか必要ないって思いません？でもそこに暮らしている人は、10年前20年前に比べるとすっかりパワーが薄くなった、だからこういう場所を作らなきゃと思ったと。例えば奈良県のある村のこども食堂ですけど、誰がやっているかっていうと、移住コーディネーターさんがやっているんですね。地域の人一人一人と引き会わせていたら時間がかかってしょうがない。こども食堂をやれば、そこに地域の人が何十人も入れ替わり立ち替わり来る。そういう場所を作って、そこに連れて行けば、地域のいろんな人と一気に知り合う。これは良いっていうんで、やり始めたそうです。こうやってどんどん人が集まってくるっていう感じになる。そうすると、人と人がつながっていきますね。

「交流や居場所が地域にもたらす効果 ～こども食堂で出会った最高齢のハルさん～」

香川県多度津町に住んでいる98歳のハルさん。私がこども食堂で出会った最高年齢です。ハルさんはデイサービスから帰ってきて、こども食堂で、ひ孫ぐらいの年齢の子どもとおはぎとか漬物盛り合わせを作ったりするのが楽しみで欠かさず来るって言っていました。こういう場所があると知り合えて、それが張り合いになって高齢者が元気になって、高齢者施設が、こども食堂とかやり始めたんですね。やっぱり子どもたちが来てくれることで、入所しているおじいちゃんおばあちゃんが元気になるんですよ。だから集う、つながる、触れ合うというような場所があると、効果が生まれる。どんな効果かっていうと、地域の土壌作りだと思うんですよね。

子どもにも効果が出ているのは、居場所の数が多ければ多いほど、自己肯定感が高いということです。例えば家も居場所になっている、学校も居場所になっている、友達の家でも歓迎してもらえる、駄菓子屋ならおばあちゃんが話を聞いてくれる、公園に行ったら一緒に遊ぶ友達がいる。居場所の数が多ければ多いほど自己肯定感が増し、チャレンジ精神も旺盛になる。そういう場所の数が多いと人は元気になり、そこで人と交流することは、健康とか幸福感の源になる。だから逆に言うと、そういう場所がどんどん廃れていくと、いろんなことが大変になってくるんですよ。

例えば、今回は震災(令和6年能登半島地震)がありました。あの災害時の要援護者リストって、聞いたことありますか？それは災害時に、例えば車椅子に乗っている一人暮らしのお年寄りや介護の寝たきりのおばあちゃんを誰が逃がすんです？ということです。東日本大震災のときの教訓でそういう人を誰が連れて逃げるのか事前に決めようってもう10年以上やっているけど、これを作れたという自治体は全国で3割ぐらいじゃないですか？地域のつながりがもうちょっとあったら、「日中仕事行っているときは無理だけど、家にいるときはわかったよ、ちょっと一声かけるようにするわ。確かにあのおばあちゃんしばらく歩けてなくて、どうすんのかなと思っていたんだ俺も」みたいな反応をしてくれる人が出てくるわけです。

「こども食堂でコロッケを初めて食べた小学生 ～子どもの課題に気づくには～」

貧困にしろ虐待にしろ、最近話題なのはヤングケアラーとか、いろんな課題を抱えている方が世の中にいるわけですが、なかなか気づかないんですよね。どうやったら気づけるかと言ったら、普段一緒に時間を過ごす中でなんですよ。こども食堂でよく起こるのは、話の途中でニコッと笑ったら歯がなかったんですよね。「いや、あんたえらいことになっているじゃないか」みたいな気づき方をするんですよ。こういう人もいました。

福岡県八女市、八女茶で有名ですけど、そこのこども食堂でコロッケ出したら、小学校5年生がね、「これ何？」って聞いたんですって。「あんた小学校5年生までコロッケ見たことも食べたことなかったのか」っていうのが、それでわかった。今、服も安く買えるし、みんなこざっぱりした格好して、取り立てて太ってもないし取り立てて痩せてもないんですよ。なかなか見ただけではわからない。そういう中でやっぱ気づくのは、いろんな時間の積み重ねですよね。そういう場所がない限り、その意識はあっても、気づくのはなかなか難しいということです。地域の人たちの関係これはやっぱり大事です。

「人のつながりは地域問題の深刻化を食い止める ～住民自治の聖地　広島県高宮町川根地区の事例から～」

広島県高宮町川根地区は最近あんまり聞かなくなりましたけど、住民自治の聖地と言われていました。この地域は、広島と島根の間の中山間地で、過疎という言葉が生まれたことで、知られています。そこに加えて、1974年に大きな水害があったんです。自治会の青年部は、本当に自分たちの地域は終わるんじゃないかというふうに思って、1週間毎晩、ほぼ夜通し話をしたんですね。そのときに自分たちでこの町、地区を守っていくしかないと決めたんだよね。高齢者が病医院行くのに片道5000円のタクシー代を払っていますから、そういう人たちのために住民で福祉有償運送っていうサービスを作って、運営する。住民運営型の今でいう「まちづくり会社」です。

自治会長の辻駒さんはなんて言っていたかというと、「昔は良かったという年寄りの目は死んでいる」って言ったんですよ。彼も年寄りなんですけど、「昔はよかったってことは、今は良くないってことだ。そうやってそこに暮らす人間が今の自分たちを否定している。そういう地域に若いやつが来たいって思うと思うか。だからまずここに暮らすじいさんばあさんが、今の暮らしをハッピーに思えるようなことだけを考えて、よそから来て欲しいとかそういうことは一切考えない。いかにここにいる人たちが幸せに暮らせるか、だけを考える。それが結果的には外の人を呼び込むんじゃないか」っていうのは、辻駒さんが言ったことなんです。結構説得力あると思いませんか。

これは木があっての土壌ってことなんですね。その土壌の部分が豊かになっていくと、いろんな課題はあるけど、深刻化しない。私たちの地域も土壌が豊かだと、いろんな課題に耐えられる地域になる。土壌作りってのは農業でも、経験のある方はわかると思いますが、今日やったら明日効果が出るってそういうもんじゃないですよね。これは効果が出るのは1年2年3年5年、もしかしたら10年かかるかもしれません。だけど、それをやっとかないと、常に対処療法を繰り返さなきゃいけなくなる。課題があったら対処療法するしかないんですけど、でも同時に土壌作りもやっておかないと、地域そのものは健全にならないというふうに思いますね。

「89歳でこども食堂を始めた一人暮らし高齢者 ～つながりは双方向に幸せをもたらす～」

89歳の時にご自宅でこども食堂を始めた方がいたんですね。その後、入院されまして、90歳の誕生日を病院で迎えられました。大都市部の高齢者の入院生活って寂しいですよ。あんまり面会に来る人もいないしね。でも、この方の入院生活はとても賑やかで、特にこども食堂の人たちやボランティアさんがお見舞いに来たりしてね。この日は誕生日だったから、「おばあちゃん早く元気になっ

て」と色紙をみんなで書いて、一緒にお祝いしました。御臨終の時には、親戚の方、こども食堂のボランティアさんもおられて、とにかく皆さん笑顔で見送られているのがとっても印象的でした。おばあちゃん、子どもたちのためにっていうことで始めたけど、結果的に地域の人たちから見送られるようなつながりをもっていかれたんですよね。だから自分のためでもあった。つながりっていうのは必ず双方向ですから、自分で与えるものもあれば、そのつながった先から与えられちゃうものもある。人のためと思って始めたけど、自分が一番得しちゃっている、受け取っちゃっているけどいいのかなみたいな、そんなこと言う人いるんですけど、あれ半分謙遜ですけど半分本当です。

「私たちが次世代に対して今できる事とは」

大事な中身は、良い祖先になるために、今、何をやったらいいか考えようということで、それは私たちが持つべき良い心持ちじゃないのかと思います。どれだけ孫にお金かけても、このまま少子化が進んでいったら、孫の通う小学校はなくなるんですよ。このまま地球温暖化が進んでいったら、やっぱり孫は水害に遭うんですよね。孫の幸せだけ考えていたら孫は幸せになれないんだ、ということが結構はっきりしてきた。次の世代全体に対して、何を今やるか、それは必ずその次に送られるってことですね。

私の兄は障害者です。車椅子に乗っていて、ボランティアさんが兄のために来てくれる。私のために来るんじゃないけど、小さい頃は私も一緒に遊んでもらっていた。そういう経験をもって育ったので、私は大人になったらボランティアをやるものだと思っていました。私は、あの時兄ちゃんのために来てくれたボランティアさんたちに返すことはできません。でも、今いる人たちに何か自分ができることをやることはできます。地域で育まれた経験をもっている子どもは、地域のために何ができるかって考える大人になるし、地域と完全に切り離されて、自分の家庭の中だけ、自分の親との関係しか知りませんという、大人になった人は、「地域のために」って、「なんで俺がやんなきゃいけないの」ってそういう感じになると思います。

私たち自身がどういう地区・地域を作って、その中で子ども、若者、あるいはお年寄りも含めて関わっていくかというのは、結果的には、次の世紀を生きる人たちから、「あの人たちのおかげで」と言われるのか、「あいつら何やっていたんだ」と言われるのか、分かれ目になっていくと思います。私たちのバトンは次の世紀まで残せるはず。それを目指して、地域を耕して行きたいし、行っていただきたい。今のこども食堂の人たちが一生懸命被災地でやっておられるように、その普段の土壌作りは、何かあったときにも必ず生きる。そういう社会を目指して頑張っていきたいですね。

会長のひとこと

富山県保育連絡協議会
会長　**小島　伸也** 氏

テレビでこども食堂のコマーシャルが良く流れています。ナレーションは、はるな愛さんです。あえて内容を再掲すると

> 「こども食堂」ってみんなの居場所なんです。
> 子どもでも　大人でも
> 一人でも　家族でも
> 食いしん坊も
> おしゃべりも
> 照れ屋さんも
> 一緒に食べる温かさが
> 笑顔をともしてくれるから
> 心をつないでくれるから
> 美味しいねと言い合うと
> もっと美味しいんだよね
> 全国こども食堂支援センター　むすびえ

テレビで流れるコマーシャルを見ながら、こども食堂の取り組みはとても大事だと思っています。むすびえ理事長の湯浅誠さんの話は地域共生社会の構築に向けて“トップランナー”の自負が感じられました。こども食堂は子どもの救貧対策・子どもの居場所づくりにとどまらない、「人々がつながる地域社会」をつくる基盤づくりを住民自身の力で推し進めています。「価値は多世代交流にあり」と結論づけておられます。

富山県はつい先日まで全国最下位のランナーでした。今は少し順位が上がりましたが、周りを気にせず、足元をしっかり見てやれることから実践しましょう。民生委員児童委員とこども園、特別養護老人ホームと保育園、地域有志とこども園有志など形のない組み合わせでいいのです。全国の順番はいいのですが、こども食堂が多様に沢山ある地域共生社会の一員となりましょう。

令和５年度 小矢部市保育研究会の研修を紹介します

① **レッツダンス‼ ♪おどれどれドラドラえもん♪**
※今年から盆踊りに加わることとなった曲を一緒に踊ってみようと集まりました。

② **救命救急について「備えよう、もしもの時に」**　講師　救命救急士　長谷川氏
※もしもの時に備えて、人工呼吸のやり方や、AEDについて教えて頂きました。

③**運動遊び教室　保育者version**　講師　文化スポーツ課より　武内氏
※運動遊び教室で教えてくださっている先生に、教えるコツなどを伝授していただきました。

④ **手遊び・ふれあい遊び教室**　講師　子育て支援センターひまわり　高田氏・林田氏
※利用者の方にされている、手遊びやふれあい遊びを教えていただきました。

⑤ **作ってみよう！手作り玩具**　講師　子育て支援センターかんがるー　石原氏
※利用者の方と一緒に作成されたものを実際に作ってみました。

実際にAEDを使って！

アンケートより　今年度の自主研修はどうでしたか？

支援センターの環境や、いろんな手作り玩具を見ることができて参考になりました。早速かばんを作って子どもたちが喜んで遊んでくれてうれしかったです。

知らなかった救急時のポイントなどもわかりやすく教えてもらえてよかったです。

盆踊りはスクリーンを用いて大きく映し出したから見やすく、踊りも統一できてよかったです。

行事についての取り組みや、普段の保育のことなど情報交換ができて良かったです。

準備していただいた飾りが、かわいくて、ワクワクしました。すぐに活用できるのが良かったです。飾りにもなるし、ブーメランのように投げても楽しそう。いろんな遊び方ができるなって思いました。

運動会の親子競技の参考になりました。相談する時間もあってよかったです。

ただ走るだけでなく、五感を使った運動遊びが面白かったです。簡単で、楽しい運動遊びを教えていただき、園でもすぐにやってみました。
子どもも喜んでいました継続的に遊びに取り入れたいです。

次年度は？

「運動遊び・手遊び・体操・玩具づくり」等、実践に役立つものを希望する声が多かったです。

「セロハンテープの使い方の知らせ方」や、「楽器の使い方・演奏の仕方」などを教えてほしい。
「発達障害について学びたい」という声もあり、実現していきたいと思います。

昔ながらの童謡や、手遊びを知ることができてよかったです。知らなかった手遊びもいっぱいでたくさん知ることができてよかったです。また機会を作ってほしいです。

「今年度のように職員交流しながら楽しく研修できたらいいな」という声が多く、今後も継続していきたいと思います。

ふれあい遊びを楽しみましょう

自主研修の「手遊び・ふれあい遊び」の中からふれあい遊びを紹介します。

◇わらべ歌あそび

【くすぐりあそび】

〇ポッツンポツポツ　あめがふる　(3回繰り返す)　ざ～っと　あめがふる

※ポツポツで身体のいろんなところを一本の指で触り、ザーッと雨が降るで、全部の指でくすぐるように触る。

【ひざのせあそび】

〇うまはとしとし　ないてもつよい　うまはつよいから
のりてさん(〇〇ちゃん)もつよい

※膝にのせ、リズムに合わせて上下に動かす。

【お手玉を使って】

〇ぺったらぺったん　もちつけ　もちつけ(3回繰り返す)

※手を杵に見立て、餅をつくようにお手玉をつく。

もちつけた　はい　かみだなへ

※お手玉を頭にのせて落ちないようにバランスをとる。

ことしもおこめがたくさんとれますように　おねがいします。

※頭を下げてお手玉が落ちるのをキャッチ。

＊参考文献・赤ちゃんからのあそびうた(CDつき)

紙パックのクルクルフラワー

自主研修の、「作ってみよう!手作り玩具」より紹介します。

★準備するもの
カラーペン
キラキラシール
牛乳パック

テープでとめて
輪にする

セロテープの
芯の大きさが
ぴったり

出来上がり

＊参考文献　パプリカ(学研)2020.夏号

編集後記

コロナ前の日常に一歩ずつ近づいている一方、突然発生した能登半島地震。県内では住宅被害が1万2千棟を超え、尽大な被害をもたらしました。被災された皆様に心よりお見舞い申しあげます。そんな中行われた「子育て支援フォーラム」は、たくさんの方が参加し賑やかな開催となりました。こんな時こそ、「つながり」「集い」「触れ合い」が大切だと実感した時となったのではないでしょうか。子どもからお年寄りまで、人と人がつながっていけるこども食堂を中心とした地域づくりを目指し、自分の居場所を作っていけたらいいのかもしれませんね。最後のページには「ふれあい遊び」が紹介されています。親子で楽しんでみてください。フォーラムに参加いただいた皆様、出演していただいた皆様、ありがとうございました。

連絡先

「保育の出前」についてのお問合せは、
お近くの保育所(園)・認定こども園または、
県保育連絡協議会(076-431-6727)へ。

発　行：富山県保育連絡協議会
〒930-0094 富山市安住町５番21号サンシップとやま内
TEL 076-431-6727 FAX 076-432-6064
https://toyama-hokyo.jp/
発行日：令和６年３月